

疾駆する大熊

——オールド・ベンはどこから来たのか——

千 葉 淳 平

Synopsis: In recent decades, William Faulkner has begun to be considered an environmental writer because his novella “The Bear” has been thematically classified as nature writing. Old Ben, whose foot is wounded by a hunter’s trap, embodies the wilderness being harmed. However, “The Bear” is a more complex work and cannot simply be analyzed within the framework of a binary opposition between wilderness and civilization. Ike associates the image of Old Ben speeding through the wilderness with a locomotive, which implies that Old Ben stands for the possible hybridity between the two. This paper aims to clarify Ike’s vision by examining the model and origins of the character of Old Ben.

序

21 世紀の現代において環境問題に関する関心は、経済的なものであれ倫理的なものであれ高まる一方であり、持続可能な開発や代替エネルギーの模索などが以前にも増して叫ばれている。この時勢の中で、ウィリアム・フォークナー（William Faulkner）は「環境作家」（Saikku 529）として認識されることがあり、その大きな要因として挙げられているのが、『行け、モーセ』（*Go Down, Moses*）の 5 章として組み込まれている「熊」（“The Bear”）である。この作品においてフォークナーは人間が引き起こした環境変化を主題の一つに据えている。大規模な伐採に晒されているミシシッピ州の森林地帯において、大熊オールド・ベン（Old Ben）は、過去のものとなりつつある豊穡なウィルダネスそのものを体現する存在である。それゆえに、森林を切り開き、その奥深くにまで侵入して人や材木を運搬する鉄道は、オールド・ベンとは対極に位置するものである。

しかしながら、オールド・ベンと鉄道の関係性を、破壊される自然と破壊する文明という二項対立的視点からのみ考察するのは不十分であるようだ。なぜなら、作品中においてオールド・ベンのイメージが機関車のそれと重ね合せられている箇所が複数見つかるからである。オールド・ベンが森林の中を機関車のように力強く疾駆しているのだ。そこで本稿では、まず、オールド・ベンの創作上のモデルを探求することで、フォークナーがオールド・ベンをどのように見ていたのかを明らかにしたい。そして、そのオールド・ベンのモデルから一つの姿を提示することで、大熊が機関車と結びつけられる要因を推察し、それが作品の解釈にどのように影響するのか考察する。

1. オールド・ベンはどこから来たのかーそのモデル

オールド・ベンの創作に大きな影響を及ぼしているのは、ハーマン・メルヴィル (Herman Melville) が描いたモービー・ディック (Moby Dick) であることは言うまでもない。フォークナー自身は『白鯨』(Moby-Dick: Or, the Whale) を愛読書の一つとして幾度となく言及しており、『行け、モーセ』の執筆中に当時7歳の娘に対してこの重厚な大作を朗読していたという逸話はよく知られている。リック・ウォラック (Rick Wallach) の “Moby Bear: Thematic and Structural Concordances Between William Faulkner’s ‘The Bear’ and Herman Melville’s *Moby Dick*” という論文は明快なタイトルが示す通りの内容であり、彼によればフォークナーの作品においてエイハブ船長 (Captain Ahab) はブーン・ホガンベック (Boon Hogganbeck) に置き換えられ、モービー・ディックの役割はオールド・ベンが担うことになっている (50)。このモービー・ディックの創作に際してメルヴィルはモカ・ディック (Mocha Dick) という実在したとされる抹香鯨をモデルにしていたことが知られており、「並外れた巨体と強さ」を持ち、「羊毛のように白い」モカ・ディックの身体的特徴はそのままモービー・ディックに反映されている (Reynolds 379)。

ウォラックが指摘するようにモービー・ディックと多くの点で共通するオ

ールド・ベンの場合においても、メルヴィルが実在の鯨をモデルにしたように、フォークナーもまた実在する熊を参考にしていたと考えられている。1955年のインタビューにおいてフォークナーは次のように回答している。

There used to be a bear like Big Ben in our country when I was a boy. He'd gotten one paw caught in a trap, and 'cause of that, folks used to call him Reel Foot, 'cause of the way he walked. He got killed too, though not so spectacularly as I killed him in the story of course. . . . (LG 224)

ールド・ベンの特徴の一つである、罠にかかって切断された足指は、このリール・フットから引き継いだものとわかる。フォークナーが述べるように、リール・フットという熊がールド・ベンのモデルであるならば、そのモデルが持つ身体的特徴を明らかにすることで、作品中ではほとんど描かれていないールド・ベンの姿を捉えることが可能になるだろう。

フォークナーのインタビューからはリール・フットに関する情報はこれ以上得られないが、フォークナーと幼い頃からの友人であったジョン・カレン (John B. Cullen) は、リール・フットについてフォークナーより詳細に記述している。

Old Reel Foot had lost two of the toes off his left front paw; Joe measured his tracks, and they were eight inches wide. For twenty years, Old Doc said, he had lived in this jungle [. . .]. Old Reel Foot had either whipped or killed every pack of dogs that followed him into his jungle lair. (27-28)

カレンの描写からも、確かにールド・ベンはリール・フットをモデルにしていることが読み取れる。二人の言及からはリール・フットの種を特定できないが、それはおそらく両者にとってあまりにも周知の事実だったのかもし

れない。というのも、北米大陸にはホッキョクグマを除けばグリズリー（ハイイログマ）とアメリカクロクマの二種が生息しているが、生物学者のブラッド・ヤング（Brad Young）によれば、ミシシッピ州にはアメリカクロクマの一種しか生息していないことがわかっているからだ（“Facts and Fiction”¹ 10）。白人の開拓以前にはネイティヴ・アメリカンによってアメリカクロクマの狩猟が行われていた記録も残っているほどに、ミシシッピ州におけるアメリカクロクマとの関わりは歴史が長く、馴染み深いものである（Young, *Mississippi* 1）。

フォークナーはこのアメリカクロクマに関して全く言及していないが、作品中に描き出されたオールド・ベン²の姿を詳細に拾い上げればそのアメリカクロクマとしての特徴を確認することができる。少年アイク（Ike）がハンティング・キャンプに参加するようになって2年目の夏、夢にまで見たオールド・ベンになかなか遭遇できない彼に対して、その原因は銃であるとサム・ファーザーズ（Sam Fathers）が指摘する。その助言を受け入れたアイクではあるが、それだけではまだ十分ではないと自ずと実感し、さらに身に付けていた時計とコンパスを手放して森の奥に分け入る。そうすることでようやくオールド・ベン³は姿を現すのであるが、ここで示されているものは、臆病とも言えるオールド・ベンの慎重さである。人間の100倍もの鼻粘膜面積を持ち、ブラッドハウンドの7倍もの敏感さを持つ熊の嗅覚によって（Masterson 37）、オールド・ベン⁴は銃火器の匂いはもちろんのこと時計やコンパスの金属臭に危険を察知したのであろう。グリズリーにはないアメリカクロクマの臆病さは多くの専門家が指摘しているところである。例えばヤングによると、「否定的な連想のほとんどはミシシッピ近辺にはいないグリズリーの関する物語に由来する。グリズリーは生来攻撃的である一方、アメリカクロクマは極めて臆病である」（“Facts and Fiction” 11）。そのため、「人間が付近にいることを察知した野生のアメリカクロクマはたいてい恐れをなして逃げていく」（Masterson 40）。アメリカクロクマにとって「勇気の大半は退却なのである」（Taylor 30）。この性質はまさにフォークナーが描き出したオールド・ベンの姿そのものである。フェイス（fyce）と呼

ばれる雑種の小型犬をハンティング・キャンプに連れて行ったアイクは不意にオールド・ベンと遭遇するが、「ファイスの半狂乱の吠え声に不意を討たれた驚きから」立ち上がったオールド・ベン、すぐ傍にまで近づいたアイクとファイスに攻撃を加えることもなく立ち去っていく (*GDM* 202)。この出来事を別にしても、オールド・ベンが作品中に登場しているのはほとんどが逃走するシーンである (214–16, 228–30)。その際、猟犬を何頭も殺していることが描かれているが、それは何も大熊が好んで殺戮を行っているのではなく逃走のために否応なしにとる手段であることは明白である。あるいは、襲いかかってくる猟犬達を、ただ、「一瞬かがみ込んで軽くなでた」だけなのだろう (190)。本来穏やかで臆病なアメリカクロクマが他の動物を襲うことはほとんどなく、その食性の 90 パーセント以上が植物であり、残りもほぼ昆虫や死肉から成っている (*Young, Mississippi* 3)。そのため、スペイン少佐 (*Major de Spain*) の仔馬が襲われた事件において、オールド・ベンではなく野生化した雑種犬のライオン (*Lion*) がその犯人であったことは極めて現実に即した描写と言える。アメリカクロクマによる家畜被害より遥かに多いのが飼い犬もしくは野良犬によるものなのだ (*Masterson* 93)。

このように見てくれば、オールド・ベンは紛れもなくアメリカクロクマだと確認できるのだが、では、そのオールド・ベンモデルであるとフォークナー自身が認めているリール・フットはどのような熊だったのか。先に引用したように、フォークナーは、彼の少年時代にリール・フットという熊が実在しており、最終的には仕留められたのだと述べている。一方で、フォークナーの言うリール・フットについてさらに詳細に言及しているカレンによれば、フィル・ストーン (*Phil Stone*) の父ジェイムズ (*James*) が所有していたキャンプ地でリール・フットは目撃されていた (27)。このキャンプ地はラファイエット郡の西隣に位置するパノラ郡にあり、この地をフォークナーは、1915 年の秋にフィル・ストーンとともに初めて訪れたと記録にある (*Blotner* 176–77)。しかしながらフォークナーがこのジェイムズ・ストーン所有のキャンプ地においてリール・フットを目撃したというわけではない

ようだ。カレンによれば、1914年の秋、降水量が極めて少なく乾燥したデルタの森林は山火事によって焼き尽くされ、その地に生息していた熊のほとんどが別の場所へと移動してしまった。そして第一次世界大戦を挟んで、デルタは町や綿花畑へと姿を変えていったために、リール・フットのその後がどうなってしまったのかを知る者はなく懸念を抱いていたとカレンは回想している(28)。このようにリール・フットの生死についてフォークナーとカレンの言及は食い違っており、また野生動物が激減した火事の翌年にフォークナーがストーン所有のキャンプ地を訪れていることから、カレンが言及するパノラ郡のリール・フットをフォークナーが実際に目撃した可能性は低いものだったのではないだろうか。このことを後押しするかのようにはカレンは、フォークナーがリール・フットそのものも、その足跡さえも実際には見たことがないのではないかと推測している(43)。

カレンの推測が正しいとすれば、フォークナーが言及しているリール・フットはカレンが指摘する熊とは別のものである可能性がある。ホレス・ケファート(Horace Kephart)が1913年に発表した *Our Southern Highlanders* にはスモーキー山脈での熊狩りが克明に描かれており、この作品が1976年に再版される際その序文を書いたジョージ・エリソン(George Ellison)は、フォークナーの「熊」がケファートの作品を下敷きにしているのではないかと指摘している。*Our Southern Highlanders* では、長年に渡ってハンターから逃れ続けたオールド・リールフット(Old Reelfoot)と呼ばれるアメリカクロクマが最終的には仕留められるのだが、その時熊に飛びかかっていた雑種の猟犬コウリー(Coaly)も同時に命を落とす。熊と犬と人間という三者における相互関係が「熊」におけるそれと非常に類似しており、この作品ではフォークナーが言及した通り、足の不自由な大熊は確かに殺されているのである。エリソンが指摘するように、「熊」の読者ならば、*Our Southern Highlanders* において共通するものを多数見出すことだろう。

とは言え、エリソンの指摘もまた根拠に乏しいために確証するに足るものではなく、フォークナーが言及するリール・フットの実体は不確かなままである。だが、カレンが言及していたリール・フット(Reel Foot)とは僅か

に異なりはすれども、オールド・リールフット (Old Reelfoot) と呼ばれる熊が *Our Southern Highlanders* にも登場することから、この同様の名称を持つ熊が特定の一頭ではないことが明らかとなる。ケファートは、「他の地域や遠く離れた場所にもそれぞれの『リールフット (reelfoot)』』が存在している」と書いており (108)、またフォークナー自身もデルタの森林地帯は、「罨に駄目にされた足を持つ熊が Two-Toe や Three-Toe や Cripple-Foot と呼ばれてきた土地」であると描写している (*GDM* 221)。つまり、オールド・ベンは、人間が仕掛けた鋼鉄の罨に傷つけられたクマの代表であり、アメリカ中に無数に存在する小文字の“reelfoot”の総体であると言えるのではないだろうか。

ここで、フォークナーがアメリカクロクマについて一言も言及しておらず、また、オールド・ベンが小文字のリール・フットの総体として現れていることを踏まえれば、そのように呼ばれる熊の範疇にグリズリーも含めなければならないだろう。なぜなら、オールド・ベンの生態はすでに述べたようにアメリカクロクマそのものであるが、フォークナーが断言していないのでそれとして確定することができず、また、オールド・ベンにまつわる物語は、後述するようにきわめてグリズリーのそれと酷似しているために、グリズリーを完全に除外することが適当だとは言えないからだ。さらに、そもそもリール・フットという呼称はグリズリーに対して多く使用されていたことが、数多くの記録に残されている。その中から代表的なものを見てみよう。

オールド・ベンの場合と同様に、「数頭のグリズリーは際立った特徴と行為のために名を知られて」おり、「中でも最も注目すべきは Old Clubfoot や Old Reelfoot と呼ばれる熊であった。罨に足の一部を奪われた熊はその後他とは異なった足跡を残すようになる」(*Storer and Tevis* 261)。つまり、人間が仕掛けた罨にかかり足を負傷したグリズリーもまた同じく、当時は複数頭存在していたということである。リール・フットと呼ばれたグリズリー全般に共通している特徴は、「途方もない大きさ」で「不自由になった足」を持ち、「弾丸を通さない」という不死性を備え、家畜や農作物に対して多大な被害をもたらしたというものである (265)。これらのグリズリー

としての要素が、アメリカクロクマであるオールド・ベンに付与されているとも考えられる。

グリズリーに関する数多くある記事の中でも特に興味深いものは、1898年10月2日に発行された *San Francisco Call* に掲載された“Death of Old Reel Foot: A Grizzly That Terrorized Four Counties”と題されたものである。この記事に登場するカリフォルニア北部一帯を拠点にしていた巨大なグリズリーも同じくリール・フットと呼ばれている。このリール・フットはいかなる弾丸によっても仕留めることができない身体を備えており、最終的にはハンターによって心臓をナイフで一突きにされ絶命する。その身体からは45発の弾丸が発見されており、この名高い大熊を一目見ようと近隣から多くの人が集まったという(19)。この記事の内容は、「熊」においてブーンがオールド・ベンをナイフで仕留めた状況と似通っており、オールド・ベンの場合ではその身体から52発の弾丸が見つかったことが記され、さらには仕留められた大熊を見るために近隣一帯から住民が多数集まってきたことまで共通しているのだ(GDM 236-37)。ただ、この記事をフォークナーが実際に読んでいたかといえ、それもまた推測の域を出ないところである。とはいえ、ハンティング・キャンプにおいて狩猟そのものよりもハンターたちの噂話や伝説を好んで聞いていたというフォークナーが、どこかでこの新聞記事の内容を耳に挟んだ可能性は否定できないだろう。

このようにオールド・ベンは、種としてはアメリカクロクマであることに疑いはないが、その姿にはグリズリーの要素が色濃く反映されていると言える。これは、ミシシッピでは一般的なアメリカクロクマであるオールド・ベンを際立たせるために、フォークナーが法螺話的、伝説的要素の強いグリズリーの物語を下敷きにしていると考えられるのではないだろうか。また、19世紀後半から20世紀初頭にかけて大西洋側各地で次々に狩り尽くされていく最後の大熊グリズリーを(Storer and Tevis 26-30)、縮小していくデルタのウィルダネスと重ね合わせたとも考えられるだろう。あるいは、フォークナーの頭の中で、伝え聞いた物語や自分の経験したことなどの記憶といった種々の要素が入り混じって一頭の熊の形を成したのかもしれない。それゆ

えに、オールド・ベンは、種、空間、記憶や虚構といった様々な境界線を越えて、アメリカ中に存在していたあらゆるリール・フットを統合して生み出されたと言えるのだ。

2. 大熊はどこから来たのか——その出自

オールド・ベンはそれ自身がウィルダネスの象徴であり、権化であり、またウィルダネスそのものである。そのため、“that doomed wilderness whose edges were being constantly and punily gnawed at by men with plows and axes who feared it” (*GDM* 185) という描写は、オールド・ベン自身についての表現でもある。人間がウィルダネスに持ち込んだ鋼鉄製のトラップにオールド・ベンが片足を挟まれ、それから逃れる際に足指が切断されたのだ。このようにオールド・ベンが、破壊されつつある森林の現状をメタファとして表している一方で、その元凶として見做されているものは鉄道である。アイクが衝撃と悲しみを持って、変貌していくウィルダネスを目撃している。

[Ike] looked about in shocked and grieved amazement even though he had had forewarning and had believed himself prepared: a new planning-mill already half completed which would cover two or three acres and what looked like miles and miles of stacked steel rails red with the light bright rust of newness and of piled crossties sharp with creosote. (303)

鉄道の敷設が進み、それに伴い森林地帯の開発も加速していく。マーク・デッカー (Mark T. Decker) によれば、機能的な鉄道網の拡大につれて、公有、私有を問わず広範囲の森林が商品化されていたのだ (477)。それゆえにこのような鉄道はオールド・ベンとは対蹠的な立ち位置にあると言える。

それにもかかわらず、作品中では、オールド・ベンと機関車は同一化して

描かれている。まず、少年アイクがオールド・ベンに実際に遭遇するより前、年長のハンター達から多くの知識を受け継いだ彼の脳裏に浮かぶ大熊の姿である。“[Old Ben] sped, not fast but rather with the ruthless and irresistible deliberation of a locomotive” (*GDM* 185). 次に、アイクが実際にオールド・ベンを度々目撃するようになった頃、彼が想像していた以上のオールド・ベンの姿を垣間見るのだが、やはり機関車との連想は継続している。“It [Old Ben] rushed through rather than across the tangle of trunks and branches as a locomotive would, faster than he had ever believed it could have moved” (202). そしてこの場面を、オールド・ベンが最期を迎える直前に、アイクが回想するときに三度目である。“the thick, locomotive-like shape which he had seen that day four years ago crossing the blow-down, crashing on ahead of the dogs faster than he had believed it could have moved, drawing away even from the running mules” (228). このように、機関車の力強さと推進力、そしてずんぐりとして頑強な、典型的に男性的な姿形などの言わば身体的特徴を大熊は共有している。つまり大熊は機関車にとってもよく似た存在としてイメージされているのである。だが、たとえそうだとすると、ウィルダネスの化身と文明の利器という真逆に位置する二者を相似物として重ね合わせた表現を、アイクはどうして三度も用いているのか、議論を呼ぶところである。この問いに答えるために、機関車の持つ象徴的な意味合いを読み取ることが必要になってくる。そうすることで明らかとなるオールド・ベンと機関車との関係性から、現在のオールド・ベンがどのようにして生まれたのか、その出自を推定することができるはずである。

南部における鉄道の役割、機能、そしてそれが象徴するものを考察したデッカーは、アイクにとって北部の鉄道やハイウェイと接続した後の南部は他者によるレイプによってできた子供であり孫であると述べている (483)。さらに、フレドリック・ジェイムソン (Fredric Jameson) の言葉を引用してデッカーは次のように解釈している。

[...] the South has become “‘something else’ which is no longer family or neighborhood, city or state . . . but as abstract and nonsituated as the placelessness of a room in an international chain of motels” (116)³. Unlike Jameson, however, Ike would see this placelessness as a monument to the rape of Southern culture by Northern capitalism. [...] [The South] is therefore fundamentally not Southern but instead “something else” that is not the banality of Jameson’s chain motel but instead the horrifying reminder of the South’s defilement. (484)

このようにデッカーは、北部資本主義による南部文化のレイプという形にまで敷衍しているが、その手段が鉄道であり、その被害を直接受けているのがウィルダネスであることから、本稿では南北の二項対立ではなく、それぞれを鉄道とウィルダネスという構図のままで援用する。アイクが驚愕したように、巨大な製材所と鉄道は、彼が見慣れたウィルダネスをすっかり変貌させてしまい、その後に残った“placelessness”は、ウィルダネスが凌辱されたことを思い起こさせるものとして機能しているのだ。

このレイプの図式において、当然ながら、鉄道がファリック・シンボルとして表されている一方で、ウィルダネスは女性器の役割を担っている。ウィルダネスに女性性が付与されている一例として、アイクが実の母親を亡くした10歳の時、サムとともにウィルダネスの内奥へ分け入って行く場面は出産のイメージとして描かれている。

[...] the wilderness closed behind his entrance as it had opened momentarily to accept him, opening before his advancement as it closed behind his progress, [...] the wagon progressing not by its own volition but by attrition of their intact yet fluid circumambience, drowsing, earless, almost lightless. (*GDM* 187)

このときアイク自身も「自分自身の誕生を目撃していた」(187) ことが語られており、確かにこの描写は、胎児が送り出される際の産道が拡張し収縮するイメージである。しかしながら、進行方向が内側へ向かっていることと、“intact” という語を考量すれば、この描写は、出産というよりもむしろ性行為のメタファとして読むべきであり、ウィルダネスは女性器そのものとして描かれていると考えられるだろう。

このウィルダネスと鉄道の交わりから産み出されたものは、戦後の南部そのものだと言われているが、本稿においては、それにオールド・ベンを当てはめて考えてみたい。ウィルダネスを母に、鉄道を父に持つことで、オールド・ベンがウィルダネスの化身でありながら、科学技術の結晶である機関車と同一化して描写されているのである。これを示唆するかのような挿話が作品中に見つかる。森林の中に鉄道が初めて開通した時、鉄道に驚いた子熊が近くの木に登ってしまい、その下を何度も行き来する鉄道のために子熊はしばらく木から下りることができなくなってしまう。これを聞いた人々が鉄道の運行を一時止めたことでようやく子熊は木から下り、線路を辿って走っていく (304-05)。一見すれば、古き時代を回顧する描写のようであるが、ファリック・シンボルである鉄道が女性器としてのウィルダネスの中を行き来することは性行為そのものであり、そう捉えれば線路は産道と同義ということになる。また、あるハンターが、動く列車の車掌室から銃を撃っていたという記述からは射精を想起させる (304)。それゆえに、列車が線路上を何度か往復したのちにそれと同じ線路を辿っていく子熊は、鉄道とウィルダネスの混血児として産み出されていると考えられるのだ。そしてこの子熊がその後のオールド・ベンを暗示するものであると見なすことができるであろうし、あるいはこの子熊自身がオールド・ベンへと成長していくと推測することも可能だろう。アメリカクロクマの平均寿命が 18 年であり、野生下でも 25 年以上生きるものもいることを踏まえれば (Masterson 25), 1862 年頃に生まれた子熊が 1883 年の 12 月には「擦り切れた歯」(GDM 236) を持つ老熊になっ⁴ていても不思議ではない。このように考えれば、突然挿入される、取って付けたような子熊のエピソードが作品全体に対して持

つ意義を説明することができ、オールド・ベンと鉄道が同一化して描かれている訳を明らかにする証左となりえるだろう。

3. 大熊はどこへ行くのか

1章で見てきたように、オールド・ベンは人間により傷つけられたアメリカ中のリール・フットの総体であると考えることができ、その姿が、破壊され、変貌していくウィルダネスの窮状を訴えていることは明白である。また、ウィルダネスと鉄道が交差し、その混血児として生み出されたオールド・ベンは、鉄道的要素を帯びているため先代までのウィルダネスの姿とは異なるものであり、デッカーの言葉を借りれば、ウィルダネスが凌辱されたことを思い出させるものとして現前していると言える。

但し、ここで確認しておきたいことは、オールド・ベンと機関車を重ね合わせているのはアイクだということである。つまり、アイクにとって、破壊されていくウィルダネスを象徴するオールド・ベンとは、アメリカ全土に蛸足のように張り巡らされた鉄道網を駆ける機関車のイメージとして見えているのだ。このことは、前述したこととは対照的に、ウィルダネス自身が、破壊されていく苦境を乗り越え、生き延びていく頑強さも備えていることを示唆しているとも考えられるだろう。生存競争を勝ち抜くための強い遺伝子を残す最良の手段は、既存のものとは異なる免疫システムを組み込み複合させることである。つまり、「自然というものは雑種において繁栄していくのである。よく混じり合うことが生命のモットーなのだ」(Ackerman 38)。機関車の要素を併せ持つオールド・ベンが森林の中を疾走する姿や、ウィルダネスの中へ消えていく列車が「小さな煤けた害のない蛇」(GDM 304)に例えられていることなどがこのことを物語っている。アイクが見るウィルダネスとは、文明と排他的二項対立関係にあるのではなく、文明や人工物さえも飲み込み、その遺伝子を組み込んでいく力を有するものであるということだ。たとえオールド・ベンの命が尽きたとしても、それは「無数の生命へと還元され、」大地の中で連綿として継続する一つのものとなるのである。

(313)。だからこそ、「ウィルダネスは聳え立っていた。物思いに耽りながら、何物にも頓着せず、計り知れず、永遠に、緑に。どんな製材小屋よりも古く、どんな鉄道の支線よりも長く」(307)とあるように、ウィルダネスは、その内にあるものが人工的な異物であろうと気に留めることもなく、自身の一部として還元し、それよりも長く延びていくのだ。

当然ながら、このようなヴィジョンは、ウィルダネスの現状に目を背け、鉄道や自動車を利用するアイクの楽天的、非干渉的態度を含む希望的観測に過ぎない。そうではあるが、現代のミシシッピにおいて、モーションカメラやマイクロチップによる追跡機器などを活用したアメリカクロクマの保護活動が行われているように、科学技術は最近になってようやくウィルダネスへの歩み寄りを見せている。アイクの視点は19世紀とは異なる、新しい形としてのウィルダネスを提示していると言えるのではないだろうか。

注

¹ 正確には、ミシシッピ州北部にはアメリカクロクマ (*Ursus americanus americanus*)、南部にはルイジアナクロクマ (*Ursus americanus luteolus*) の二亜種が生息しているが、外見上認識できるような差異はほぼない。

² リール・フットは、「半ば生身の熊であり、半ば伝説でもある。片足を事実置き、もう片方は創作や空想に置いている」と評されるほどにハンター達の誇張や粉飾は少なくなかった (Storer and Tevis 261)。

³ ジェイムソンの引用は、*Postmodernism or, the Cultural Logic of Late Capitalism* (Durham: Duke UP, 1991) を参照。

⁴ 子熊のエピソードは、1850年生まれのカヤス (Carothers McCaslin) が12歳の時のものであり、オールド・ベンが仕留められたのは、1867年生まれの子熊が16歳の時である。また、すり減った歯は年老いた熊に共通の特徴であった。ケファートが描いたオールド・リールフットの場合も同様に、「その歯は歯茎まですり減っていた」と記されている (108-09)。

参考文献

- Ackerman, Diane. *A Natural History of the Senses*. New York: Random, 1990. Print.
- Blotner, Joseph. *Faulkner: A Biography*. 2 vols. New York: Random, 1974. Print.
- Cullen, John B. *Old Times in the Faulkner Country*. Chapel Hill: U of North

- Carolina P, 1961. Print.
- “Death of Old Reel Foot: A Grizzly That Terrorized Four Counties.” *San Francisco Call* 2 Oct. 1898: 19. *California Digital Newspaper Collection*. Web. 20 Aug. 2014.
- Decker, Mark T. “‘Moving Again among the Shades of Tall, Unaxed Trees’: Regional Utopias, Railroads, and Metropolitan Miscegenation in Faulkner’s *Go Down, Moses*.” *Mississippi Quarterly: Journal of Southern Cultures* 59 (2006) : 471–87. Print.
- Ellison, George. “A Bear Hunter for the Ages.” *Smokey Mountain News* 12 Mar. 2014. Web. 21 Aug. 2014.
- Faulkner, William. *Go Down, Moses*. (GDM.) New York: Vintage, 1990. Print.
- . *Lion in the Garden: Interviews with William Faulkner 1926–1962*. (LG.) Ed. James B. Meriwether and Michael Millgate. New York: Random, 1968. Print.
- Kephart, Horace. *Our Southern Highlanders*. New York: Outing, 1913. *Project Gutenberg*. Web. 21 Aug. 2014.
- Masterson, Linda. *Living with Bears: A Practical Guide to Bear Country*. Masonville: PixyJack, 2006. Print.
- Reynolds, J. N. “Mocha Dick: Or the White Whale of the Pacific: A Leaf from a Manuscript Journal.” *Knickerbocker: Or, New-York Monthly Magazine* 13.5 (1839) : 377–92. *Google Books*. Web. 4 Jul. 2014.
- Wallach, Rick. “Moby Bear: Thematic and Structural Concordances Between William Faulkner’s ‘The Bear’ and Herman Melville’s *Moby Dick*.” *Southern Literary Journal* 30.1 (1997) : 43–54. Print.
- Saikku, Mikko. “Faulkner and the ‘Doomed Wilderness’ of the Yazoo-Mississippi Delta.” *Mississippi Quarterly: Journal of Southern Cultures* 58.3 (2005) : 529–57. Print.
- Storer, Tracy I. and Lloyd P. Tevis, Jr. *California Grizzly*. Berkley: U of California P, 1996. Print.
- Taylor, Dave. *Black Bears: A Natural History*. Markham: Fitzhenry and Whiteside, 2006. Print.
- Young, Brad. “Mississippi Black Bears: Facts and Fiction.” *Tree Talk* 29 (2007) : 10–11. Print.
- . *The Mississippi Black Bear*. Jackson: MDWFP, 2007. Print.